

論文

中学古典和歌教材の再検討

— 古典和歌教材に詞書は不要か —

Rethinking of "Waka Poems" as Educational Materials in Middle High Schools

徳植 俊之

Toshiyuki TOKUUE

キーワード：中学国語教科書、和歌と詞書、古典和歌教材、古今集

はじめに

中学校国語の古典教材の中で、古典和歌は第3学年に登場する。光村図書・学校図書・教育出版・三省堂・東京書籍いずれの教科書においても、「万葉集」・「古今集」・「新古今集」からおおむね十五首程度の和歌を選び、掲載する。

ところで、今さら述べるまでもないが、現行の学習指導要領では、小学校・中学校ともに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を設け、小学校第1学年から系統的に学びながら、古典に親しみ、古典に関する知識や理解を深めることを求めている。特に中学校では、第2学年で「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」、第3学年で「古典に関する簡単な文章を書くこと」をあげて、表面的な理解ではなく、学習者が各自の理解をより深化させ、鑑賞を深めていくことを要求している。そのためには、古典作品をしっかり読み込み、解釈することが求められることは言うまでもない。しかしながら、現在使用されている中学校国語の教科書における古典和歌教材の取り上げ方がそれに適した形になっているかという点、疑問に思われる点も見

受けられる。本稿ではそれらの問題点を指摘し、どのような改善を進めていくべきなのかについて考察したい。

調査の対象とした教科書は次の通りである。論文中、各教科書は出版社名で呼称することにする。

・学校図書『中学校国語3』平成二十八年二月十日発行) ↓「学校図書」
・教育出版『伝え合う言葉 中学国語3』(平成二十八年一月二十日発行) ↓「教育出版」

・三省堂『現代の国語3』(平成二十八年二月二十五日発行) ↓「三省堂」
・東京書籍『新編新しい国語3』(平成二十八年二月十日発行) ↓「東京書籍」
・光村図書『国語3』(平成二十八年二月五日発行) ↓「光村図書」

なお、和歌の引用及び歌番号は、新編国歌大観本文による。また、適宜漢字等をあてた。

一 各教科書における古典和歌教材の示し方

まず、各教科書において古典和歌教材がどのような形で掲載されているか、と

いう点を確認しておきたい。各教科書が採歌した歌数は次の通りである。

	学校図書	教育出版	三省堂	東京書籍	光村図書
万葉集	7	7	10	8	9
古今集	4	3	3	4	3
新古今集	4	3	3	4	3
古今集仮名序	×	×	○	○	○

*古今集仮名序は冒頭部分のみを掲載する。

この表を見ると明らかに『万葉集』の歌が多いことがわかる。こうした傾向は高等学校の「国語総合」にも見られ、万葉・古今・新古今からの採歌数はほぼ同数のもの（第一学習社・東京書籍・明治書院）もあるが、万葉集が古今、新古今それぞれの約一・五倍となっている教科書も見られる（桐原書店・教育出版・数研出版・大修館書店）。

次に、各教科書における教材の示し方を見ると、いずれも基本的には和歌本文と作者名のみを挙げる形で掲載する。「光村図書」「学校図書」のように現代語訳を付載するものや、「教育出版」のように一部の和歌に解説文を載せるものもあるが、おおむね和歌本文と作者名のみを掲載し、詞書等は載せない。高等学校「国語総合」では、すべての出版社の教科書で、和歌教材には和歌本文と詞書とを載せているので、これは明らかに中学生の理解力、レベルを意識した処置であるろう。

ただし、ここで考えておかなければならないことは、和歌本文のみの掲載が、はたして中学生の理解度に合わせた適切な処置と言えるのかどうかということである。

和歌には、和歌本文のみで十分に内容が理解できるものと、詠歌事情をふまえないと理解できないものがある。たとえば、『百人一首』にとられた小野篁詠、

わたのはら八十島かけてこぎ出でぬと人には告げよあまのつり舟

（古今集・巻九・羈旅歌・四〇七、百人一首・一一）

は、一首単独で読む限り、多くの島々に向けて船出したと人に伝えてくれと詠んだだけの歌になってしまい、さほどおもしろい歌とは思えないように、告げる相手の「人」が誰であるのかもわからない。しかし、『古今集』では、

隠岐の国にながされける時に舟に乗りていでたつとて、京なる人のもとにつかはしける

という詞書が付されており、これによれば「人」が誰で、篁がどのような心情を込めて詠んだのがよく理解できるのである。

もつとも、『百人一首』はそもそも定家が宇都宮蓮生の求めに応じて、嵯峨の中院の障子に飾る色紙に書く和歌を選んだもので、その色紙には和歌本文しか書かれていなかった可能性が高い。現在、そのときの色紙ではないかと言われる「小倉色紙」（その真贋に関しては様々な説があり、いまだ定説をみない）には、たしかに和歌本文しか書かれておらず、詞書はおろか作者名すらもない。そもそも『百人一首』の歌は、詞書から切り離されて一首単独で鑑賞されてきた歌ではなかったかという反論も想定できよう。

しかし、『百人一首』および、実際に蓮生に届けられた可能性が高いと考えられている『百人秀歌』の歌は、すべて勅撰和歌集に入集する歌である。蓮生クラスは歌詠みになれば、勅撰集入集歌であれば、たとえ詞書がなくてもその詠歌事情はおそらくすぐ想起できたであろう。

ひるがえって、今の中学生にそのような理解レベルを要求することが無理であることは自明である。それは、中学生だけではなく、今の大方の読者も同様であろう。事実、『百人一首』注釈書では、必ずと言ってよいほど勅撰集での詞書等が紹介され、それぞれの歌がどのような詠歌事情のもとに詠まれたかについて、解説されている。

もし、古典和歌を教材として取り上げ、しかもその歌に込められた心情や背景を理解する、ということを目標に掲げるならば、それに見合った教材の示し方、掲載の仕方が必要であろうと思われる。

その点について、次に具体的に例を挙げながら検討したい。

二 古今集「人はいさ」歌

「人はいさ」歌は、『古今集』・「百人一首」にも採られた紀貫之の代表歌で、三省堂・光村図書・教育出版の3社の教科書に載る。ただし、それぞれの教科書における掲載の仕方は異なり、和歌本文のみを載せる「三省堂」、和歌本文と和歌の現代語訳を載せ、一首の詠まれた詠歌事情については欄外の注に載せる「光村図書」、和歌本文に加えて、詠歌事情の解説を含めた鑑賞文を載せる「教育出版」とそれぞれ全く異なる掲載の仕方をとる。

実は、「人はいさ」歌の場合、この詠歌事情を学習者にどう示すかという点が大きな問題となるのだが、その点を考察する前に、まず、『古今集』に付されている詞書の検討から始めたい。

はつせに詣づるごとくやどりける人の家に久しくやどらで、程へて後にいたりたれりければ、かの家のあるじ「かくさだかになむやどりはある」と言ひいだして侍りければ、そこにたてりける梅の花を折りてよめる

貫之

人はいさ心もしらずふるさととは花ぞ昔の香にほひける

(巻一・春上・四二)

詞書によれば、長谷寺に参詣するたびに宿をとっていた人の家に長らく泊まらないで、しばらくしてから訪ねたところ、その家の主が「このようにたしかに宿はあります」と家の中から言いかけたので、そこに植えてあった梅の花を折って詠んだ歌、ということになる。

歌意は、あなたの心は以前と変わりがいいのかどうか、さあわかりませんが、昔なじみのこの里では、梅の花は昔と同じ香にかおっていることですよ、ということである。

この歌を詞書から解放して一首単独で読むならば、「人」は特定の誰かを指すのではなくて世間一般の人を指し示すと解し、人の心というものは変わりやすいものであるが、自然は変わらないものだという一般論を詠んだと解釈することも可能であろう。が、詞書に示されたような詠歌事情をふまえると、「人」は宿の主を指すと見るべきである。

実はこの点も含めて、この歌をめぐるのは、宿の主が男か女か、宿の主と貫之との関係をどうとるか、などさまざまな問題があり一筋縄ではいかない。一見、わかりやすい歌のようで、実はやっかいな一首である。

さて、さきに「人」の解釈に関して、この歌を一首単独で読んだ場合には、一般論として、人の心と自然の対比を詠んだ歌ととれることを指摘した。これはこれとして解釈として成り立つであろうが、本来この歌が宿の主とのやりとりの中で詠まれたことを考えると、それは貫之の意図するところではなかったであろう。貫之は、宿の主に向けて発信しているのであって、その主へのメッセージとして解釈しなければ、この歌の方向性を見誤ることになりかねない。とすれば、この歌を解釈するには、どうしても詞書の伝える作歌事情を押さえることが重要である。

また、藤岡忠美はこの歌の詞書中に見られる「言ひいだす」の語に注目し、この語が『後撰集』では女を主格とした場合に多く用いられ、「女の言葉や建物の内部から外の男に発するもの」であると結論づけた(藤岡2015)。つまり、『古今集』詞書の伝える宿の主は女であり、その女が貫之に向けて「かくさだかになむやどりはある」と言い、それに対して貫之が返歌したと解釈すべきなのである。もともと、藤岡はその点をふまえた上で、実際にはこの贈答歌は、「恋歌もどき」の歌を男同士が戯れに詠んだものと解釈しているのであるが、それはともかくとして、貫之歌を理解するためにはどうしても詞書の伝える詠歌事情をしっかり読み解くことが必要である。

その点を確認した上で、各教科書での取り上げ方を見ていくことにする。まず、『三省堂』は和歌本文のみをあげ、「いさ」「ふるさと」「花」の三語について脚注を載せる。「学びの道しるべ」には、学習の目標として、

- ・和歌に詠まれた背景を想像しながら、情景や心情を読み取る。
- ・和歌の形式や表現の特徴を捉え、その効果について理解する。

の二点を挙げる。それをふまえて、「和歌が詠まれた背景を想像しながら、それぞれの和歌の情景や心情を捉えよう。」という学習課題を示し、さらにそれを「書くこと」に発展させようとしている。これは、言うまでもなく学習指導要領を意識してのことであるが、はたして、この歌単独で、読まれた背景を想像し、

そこに込められた作者の心情をとらえることが可能なかどうかは疑問である。同書を教科書に用いるならば、指導者が一首の詠歌事情について補足説明をしなければならぬであろう。あるいは、一首単独のものとして鑑賞し、人の心と自然との対比という一般論的な捉え方をさせるのであろうか。

また、同書では古典和歌教材に続いて、「コミュニケーションツールとしての歌」という「コラム」を載せ、発展学習につなげている。そこには「昔から、歌のやりとりは、人と人の心をつなぐ大切なコミュニケーションでした。それは、形を変えながら、現在にも受け継がれている言語文化です。」というリード文を載せ、男女の恋歌の贈答や、友人同士のやりとりの例を挙げている。もしそういう展開を期待するならば、なおのことこの貫之詠の場合、詞書は不可欠であると思われるが、同書ではこの歌に限らず、すべての和歌に詞書は付されていない。

これに対し、「光村図書」と「教育出版」は詠歌事情について触れている。「光村図書」では、和歌本文と現代語訳を載せ、脚注に、次のような詠歌事情の解説を載せる。

この歌は、作者が久しぶりに訪れた宿で、その主人に詠みかけたもの。「人」は、その相手の主人を指す。主人が、「宿は昔のままにこのようにありますよ」と言うのに対し、なじみの土地への変わらぬ心を、梅の花に寄せて詠んだもの。

詠歌事情について補足している点は評価できるのであるが、最後の「主人が詠んだもの」の一文の意味がよくわからない。さらに問題なのは、貫之歌は「なじみの土地への変わらぬ心」を詠んだ一首ではないということである。

そもそも宿の主の「かくさだかなむやどりはある」ということは、「このようにたしかに宿はあります」と事実を単に述べただけではなくて、「なむ」という強意の係助詞を用いることで、言外に、「宿は変わらぬ心があるが、そこに宿はずのあなた（貫之）の心は変わってしまったのではありませんか」という皮肉を込めているのである。それに対して貫之は、「宿の不変」を強調して心変わりを皮肉った主の言葉じりをとらえて、「宿はたしかにあるかも知れませんが、その宿の主であるあなたのお心は、さあどうでしょうかねえ。それに反して、このなじみの里では、梅の花は変わらぬ心に薫っていることですね」と返したのである。

ある。つまり、変わらぬ宿と貫之の心を対比した宿の主人に対し、貫之は主の心と梅の花の香（自然）とを対比して言い返したというやりとりなのである。そのパンチの効いたことは応酬にこそ、おもしろさがある。まして、なじみの土地への変わらぬ心など、この歌のどこにも詠まれていないのである。この「光村図書」の脚注は明らかに誤っていることを指摘しておきたい。

一方、「教育出版」はもつとも行き届いた教材の挙げ方になっている。少々長くなるが、教科書の本文をすべて引用する。

歌は、人と人との即興のやりとりにも用いられました。次の歌は、ちょっとした恨み言を言われたことに対し、軽妙に返した歌です。

紀貫之

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひける

詞書によると、作者には長谷寺に詣でるたびに泊まる宿がありました。ずいぶん久しぶりにそこを訪ねていくと、宿の主人が作者の疎遠を責めました。それに対して「人はいさ心も知らず」とよんだのです。「私を待っていたと言いますが」さあ、どうでしょうか、お心のうちはわかりません。」という意味です。つまり、私を責めるあなたこそ心変わりして、私を待っていないから、とほのめかしているのです。そして、「ふるさと」で今も変わらぬ咲き匂う梅の花をよむことにより、いつそ人の心の変わりやすさを感じさせています。親しさゆえの、機知に富んだやりとりといえるでしょう。

各教科書の中では、もつともわかりやすい解説文が付されているが、ただ、全く問題がないわけではない。この解説文は、ややもすると、お互いに相手の心変わりをなじり合っているようにもとれるのである。ここで重要なのは、あくまでもこれは軽妙なことばの応酬であって、けっして相手に対する恨みつらみをぶつけ合っているのではないということである。その点でいうと、やはり宿の主人の「かくさだかなむやどりはある」ということは大事だということになる。このことばが、やりとりの起点になっているのである。そう考えると、単に「宿の主人が作者の疎遠を責めました。」というだけではこのやりとりのおもしろさを考える材料としては不足しているということになる。

以上、各教科書における「人はいさ」歌の取り上げ方とその問題点について検討してきた。この歌に関しては何らかの形で詞書、あるいはその内容を示す解説文が必要である。また、解説文は、その和歌がもつ本来のおもしろさ、魅力に学習者がたどり着けるようなものでなくてはならない。
贈答歌を解釈するには、歌われた場の理解が重要である。そうしたことへの配慮が、教科書には求められる。

三 古今集「秋来ぬと」歌

詞書が解釈する上で重要な役割を果たしている教材の例をもう一首挙げたい。

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

(古今集・卷四・秋上・一六九)

『古今集』秋上部の巻頭歌としてよく知られた一首である。この歌を教材として掲載するのは、「学校図書」・「教育出版」・「光村図書」である。また、この歌は高等学校「国語総合」の教科書にも九社中七社の教科書にとられ、高等学校の古典和歌教材としても定番教材と言ってよい歌である。

一首は、秋の到来を視覚ではなく聴覚でとらえたところに眼目があるが、ここで重要なのは、この歌が立秋の日に詠まれた歌であるということである。

今、こころみに『日本暦日総覧 具注暦篇古代後期1』（本の友社）を用いて、延喜元年（九〇一）から同二十年（九二〇）までの立秋の日を調べた結果が次の表である。

延喜元年	九〇一	閏六月十五日	立秋日	太陽暦
二年	九〇二	六月二十六日		
三年	九〇三	七月七日		
四年	九〇四	六月十八日		
五年	九〇五	六月二十九日		
六年	九〇六	七月十日		

七年	九〇七	六月二十一日	8月2日
八年	九〇八	七月三日	8月2日
九年	九〇九	七月十四日	8月2日
十年	九一〇	六月二十四日	8月2日
十一年	九一一	七月六日	8月2日
十二年	九一二	六月十七日	8月2日
十三年	九一三	六月二十七日	8月2日
十四年	九一四	七月八日	8月2日
十五年	九一五	六月十九日	8月2日
十六年	九一六	七月一日	8月2日
十七年	九一七	七月十二日	8月2日
十八年	九一八	六月二十三日	8月2日
十九年	九一九	七月四日	8月2日
二十年	九二〇	閏六月十六日	8月2日

これを見るとわかるように、当時の立秋日は一定していない。つまり、太陽暦上の暦日と太陽暦に基づく二十四節季等の暦日との間には当然ずれが生じてくるのである。では、その点を『古今集』ではどのように処理しているのだろうか。そこで『古今集』での和歌の配列に注目したい。「夏」部の巻末歌は、

水無月のつごもりの日よめる

夏と秋と行きかふ空のかよひぢはかたへ涼しき風や吹くらむ

(夏・一六八)

であり、続く「秋上」部は、「秋来ぬと」歌以下次のように配列されている。

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

(秋上・一六九)

秋立つ日、上ののことも賀茂の河原に河遣遙しけるとともにまかりてよめる

貫之

河風の涼しくもあるかうち寄する浪とともにや秋は立つらむ (一七〇)

題しらず

よみ人しらず

わが背子が衣のすそを吹返しうらめづらしき秋の初風（一七七一）

きのふこそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く（一七二二）

秋風の吹きにし日より久方のあまの河原に立たぬ日はなし（一七二三）

久方のあまの河原の渡し守君渡りなば梶かくしてよ（一七四四）

天河紅葉を橋に渡せばやたなばたつめの秋をしも待つ（一七五五）

こひこひてあふ夜は今宵あまの河霧立ちわたりあけずもあらなむ（一七六六）

この配列に注目すると、「夏」部巻末歌は「水無月のつごもりの日」の歌であり、それに続いて「秋上」部の巻頭歌及び一七〇が立秋日の歌、一七三から彦星の訪れを待ちわびる織姫の心境が詠まれ、一七六は彦星と織姫との逢瀬の日の詠と、時間的になだらかに配列されていることがわかる。そして、一七六が七日当日の詠であるということになると、当然それより前に置かれた二六九・一七〇の立秋日は七月七日より前でなくてはならず、「夏」部巻末歌が六月つごもりであることも勘案すれば、これは七月一日ということになろう。また、これに関連して、一七三の「秋風の吹きにし日」については、「立秋の日ではなく、七月一日と考えるべきである」とする田坂憲二の考証もある（田坂2000）。このように「古今集」の配列は、時間的になだらかに整理されていることがわかり、同時に、概念的な配列になっていることが知られるのである。

さて、このことにこだわったのは、「秋来ぬと」歌をめぐって、それが実感に基づくのか、それとも概念詠なのかという点で解釈が分かれているからである。たとえば金子元臣の『古今和歌集評釈』（明治書院）が「あながちに秋にのみ風の吹き立つものでもないが、立秋の日しも恰も風の吹き立つたのを見て、これを秋の証左としたのが、詩人の興趣である。」と実感詠ととらえ、ほかにも小沢正夫『日本古典文学全集』（小学館）・竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（右文書院）・小島憲之・新井栄蔵『古今和歌集』（岩波新日本古典文学大系）などが同様に実感詠と解釈している。

それに対し概念詠とするのは少なく、窪田空穂『古今和歌集評釈』（東京堂）が「立秋と共に、秋風が荒く吹き立つといふ、当時の概念を土台にして詠んだもの」と指摘するほか、小町谷照彦『古今和歌集評釈・百十四・名篇の新しい評釈』（學燈社『国文学』第三十七巻第八号）が「当時は秋の到来は涼風で感じ取

られ、立秋には秋風が吹くということが通念化していた。たとえこの歌が実景や実感からもたらされたものとしても、概念的な季節感が前提としてあったことは否定できない。」とするくらいである。

これは研究者の解釈だけにとどまらず、実際に私が高等学校の授業でこの歌を扱ったときも、実感として理解できると納得する学習者が多かったのは事実であり、今でもこの歌は実際の体験を歌ったものという捉え方が主流ではないかとも思われる。

ところで、先の「立秋日一覽」を見ると、太陽暦ではほぼ8月1日か2日にあたっていたことが知られる。当時と今とでは気候条件が大きく異なっているので一概に比較はできないが、はたして、八月初旬にこうした実感を味わうことがまあるであろうか。もちろん年によって気候は変化するものだが、そうであるとしても、これを実感できるような気候の年がどれほどあるだろうか。

そもそも、この歌を実感できるというときのそれは、いつ頃の実感に基づいているのだろうか。精確な調査ではないが、大学の授業において学生にこの点を尋ねたところ、九月の初め頃にこういう経験をしたという学生が多かった。実際に、季節が進み、九月もはじめ、あるいは半ばになると、秋風の音を実感することがあるかも知れない。しかし、それは、立秋からはいよいよ時間がたった時点での実感である。

この歌を実感詠ととらえるか、概念詠ととらえるかは読者の解釈にゆだねられてよいと思うが、これを、秋もだいぶ深まった頃、少なくとも立秋より月日が過ぎた頃の実感詠ととらえることには問題があるだろう。

当時の気候条件が今とは異なるといつても、立秋の日に合わせるかのようにタイミングよく秋風が吹き出すとは考えにくい。もちろんそういう年もあったかもしれないが、それが例年の現象とは考えにくい。しかも、この歌は、既述したように、「古今集」におけるきわめて人工的・概念的な配列の中に置かれ、鑑賞された歌であった。それをいかにも実際に起きた現象を捉えたかのように思わせるところに、この歌の魅力があるのだが、あくまでも立秋日の感覚を詠んだ歌であることを考えると、詞書を外してしまつて、「秋のある日の実感」というような誤解を与えてしまつてはいけなからう。「光村図書」のみは脚注に「この歌は、立秋の日に詠んだもの」という注を付けるが、こうした配慮の必要な教材であることを、強調しておきたい。

四 新古今集「玉の緒よ」歌

最後に、もう一首とりあげておきたい。『新古今集』に採られた式子内親王の代表歌「玉の緒よ」の歌は、「教育出版」・「三省堂」・「東京書籍」・「光村図書」の四社の教科書に載る定番教材である。後白河天皇の皇女として生まれ、生涯独身で過ごした内親王の、絶唱といってもよい恋歌であり、多くの人々の心をつかんできた名歌であるからであらう。

ところが近年、この歌に関して、後藤祥子によって従来の解釈を大きく転換させる新説が提示された（後藤2012）。

百首歌の中に、忍恋を

式子内親王

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

（新古今・恋一・一〇三四）

この歌はもともと百首歌の中の一首であるので、実際の恋の場面で歌われたのではないのだが、問題はその歌題である。後藤は、「忍恋」という題についての用例を調査し分析した結果、これが男の場合に限って詠まれることを突き止めたが、この一首は式子内親王が男の立場に立って詠んだ歌であると喝破したのである。

こうした、最近の研究成果を教科書はどのくらい反映しているのであろうか。各教科書では、直接解釈を示すような記述はないが、「玉の緒よ」の語釈（脚注）を見ると、

（私の）生命よ。（三省堂）

私の命よ。（東京書籍）

命。ここでは、私の命。（光村図書）

とあるように、「私の命」としている。むしろそれは間違っていないのだが、この注を見れば、学習者は「私」とは式子内親王自身を指すと思うであろう。歌一首を独立したものととらえればそれも有り得るであろうが、しかしその解釈は、詞書に「忍恋」題で詠んだと記されている限りは、正しい解釈ではないことにな

る。ここに、和歌を詞書から切り離して一首単独のものとして読む怖さがある。

もちろん、これは中学校の国語の教材なのであるから、そのような学問的な正確さよりも、一つの独立した文学世界として味わうことが大事だという考え方もあるだろう。それはそれで一つの考え方であろうと思う。しかし、少なくとも、一首の和歌が本来どのような歌として詠まれたか、というレベルで考えたときに、それは誤りであるとしかたえなないこともあるということも、承知しておくべきである。また、この歌を、高等学校や中学卒業後に読んだときに、実は中学時代に学んだ解釈は誤りであった、ということになったら、それもまた問題であらう。

式子内親王の歌の場合も、やはり詞書は重要であるし、この歌を教材として取り上げるならば、実は男の立場で詠まれた歌であるということをコラムで示すといった配慮が必要になるであらう。

五 和歌教材における詞書の重要性

以上、和歌において詞書がいかに重要であるかについて検討してきた。今さら言うまでもなく、和歌には一首独立した作品として読むことが可能なものと、そうでないものがある。ところが、中学校の国語教科書においては、中学生の理解度への配慮なのか、多くの和歌が詞書を省いた形で載せられている。それが、かえってわかりにくくしまっていることに気づく必要がある。もし、詞書を省く形で載せるのであれば、一首独立した形でも理解できる作品を選ぶべきである。

また、最新の研究成果にも目配りする必要があるが、現職の教員がこうした日本文学研究の最新知見に触れることは難しい。これは、教科書編集者の責任であり、また指導書の執筆者が目配りしなければならぬことである。同時に、教科書調査官による教科書検定の段階でも当然チェックされるべきことである。文学研究も日進月歩である。新しい知見に基づいた、そして学習者がより深く読解できるような教材の示し方が求められているのである。

参考文献

- ・藤岡忠美〔1975〕「貫之の贈答歌と屏風歌―人はいさ心もしらず……」の一首をめぐって―〔文学〕岩波書店・一九七五年八月号
- ・田坂憲二〔2000〕「織女は立秋から牽牛を待つのか―『古今和歌集』七夕歌瞥見―」〔香椎潟〕第四六号・二〇〇〇年十二月号

・後藤祥子〔2012〕「女流による男歌―式子内親王歌への「視点」―」〔『世界へひらく和歌』ハルオ・シラネ他編・勉誠出版・二〇一二年五月刊〕